

# 俳句

## 級友の俳句仲間と春待てり

当時の2年J組の同級生が47年もの月日を経て、  
今も俳句を愛する仲間として親しく付き合いを  
続けている。そんな仲間の句作を紹介したい。

桐さくやマタギの里の農曆

スケッチで切り取る尾瀬や初夏の色

通院の朝に届きし夏衣

網構え爺の目子の目蜻蛉とり

いつまでも妻が先行く木の実道

凍星や多喜一の郷里読書会

悟りとは生き抜くことと雪しんしん

伊藤郁夫 (昭和41卒)

鳩小屋の残る家あり秋夕焼

職去りて遠近うかぶ夜長かな

手を休めあの日あの時古日記

ストーブに弁当句ふ昭和あり

熱燗や八十路農夫の指太し

深雪晴煙草仕草も年季あり

石投げや湖面走りて春隣

齊藤千哲 (昭和41卒)

松の葉に小さき針の氷柱かな

冬の夜のモーツアルトの甘さかな

身障の猫膝に抱き冬籠る

彼岸会や小聲で交はす村言葉

春灯や座禅の僧の細き首

啄木を読みたくなりし春の闇

耕しの始まり告げて朝雲雀

長沼 隆 (昭和41卒)

# 短歌

## 伝統の裸参り

人と神のつながり濃くなる元旦の裸参りを守る里びと  
真清水の禊で浄めし男の子等の産土神五つを巡る御輿待ち路に門辺に立つ人の影  
産土神五つを巡る御輿待ち路に門辺に立つ人の影  
声合わせ駆ける御輿の先触れの犬の遠吠え天渡りきぬ  
裸参りに少年ら増え声若し年明け靈氣を裸身に受け  
担ぎし樽の御輿の祈願札被災地の幸願うもありて  
わが拍手に会釈し走る壮年に元氣をもらい御輿見送る  
雪路踏む草鞋がそろい声そろい御輿駆けゆく次なる神へ

土橋茂徳 (昭和26卒)  
(秋田県八郎潟町)

## 早春風

45年前の秋田高校を想う

仙北谷悟 (昭和43卒)

二階の部屋の窓から 吹き込んでくる風が  
きようは違っている。  
(春の匂いが……)

僕は 風を大きく吸い込んで 目をとじる。

三月に……丘にたつ学園の坂道で  
僕はいったいどれだけの人たちに  
別れの手を振っただろう。

離れたも 友情は変わらないと信じて。  
そうして僕は なぜ貴女にまで  
手を振ってしまったのだろう

離れたも 愛しつづけることを誓って。  
冬枯れの裏山の雑木林に  
二人の写真を包んで埋めた。

別れることが まるで運命であるかのように  
別れることを 容易に自分に許して  
明日の夢に近づくことで 淋しさを隠した。

未来が愛よりも輝いて見える時つて  
あつたんだね……。

ほんとうは 貴女は 未来よりも  
美しかったに 違いないのに……。

(埼玉県さいたま市)

## 寄贈図書

「独楽庵切抜帖」

(平成24年12月〜平成25年4月)

富野巳代治 (昭7卒)

「紅顔日に日に《第9号》」

(2012年卒50周年記念)

昭和37年同期会

「一炊の夢」

あゆかわのぼる (昭33卒定)

「荒野にて」

あゆかわのぼる (昭33卒定)

「すべてはひとつの命」

やすだひでお (昭48卒)

「礎 80 秋田高校昭和

29年卒旧友録 (喜寿版)」

昭和29年卒同期会

「経絡理論なんか要らない

鍼灸治療の本I 鍼灸が

なぜ効くかを理解するた

めのコラージュ」

加藤隆久 (昭47卒)